

京都府立大学学術報告(人文)第65号 (2013年12月)

ドイツ・ナショナリズムの文脈あるいは汎欧州的・ 超欧州的文脈における「眠り姫」伝承(後編)

横 道 誠

はじめに

2012年から2013年にかけて独文論考を2本に分割して発表した。„Eine Übersicht der Auffassungen zur Herkunft des Typs AaTh/ATU 410 (KHM50). Germanische, romanische und andere Theorien in den Anmerkungen der Brüder Grimm sowie Bolte/Polivkas, im AaTh/ATU-Verzeichnis, HdM- und EM-Artikeln (Teil 1)“ (京都府立大学ドイツ文学会編『AZUR』5号、2013年、43-67頁)と„Eine Übersicht der Auffassungen zur Herkunft des Typs AaTh/ATU 410 (KHM50). Germanische, romanische und andere Theorien in den Anmerkungen der Brüder Grimm sowie Bolte/Polivkas, im AaTh/ATU-Verzeichnis, HdM- und EM-Artikeln (Teil 2)“ (『京都府立大学学術報告・人文』64号、2012年、23-40頁)である。掲載誌の出版時期の関係上、前半部が2013年、後半部が2012年に発刊された。本稿は、この2編を日本語によって増補改訂し、多々見られた至らぬ点を正し、冒頭部に問題系の概説を追加して発表するものである。概説のついた前編は、すでに岡本隆司編『京都府立大学重点戦略研究費「異文化共生学」の構築」報告書 異文化の接触・交渉・共存をめぐる総合的研究』に発表済みである(83-124頁)。今回ここに発表するのは本稿の後編という位置づけである。参照の便宜上、文献表は本稿前編にも掲載したが、増補改訂したものを今回も掲載している。

＊

『ウター索引』(ハンス＝イェルク・ウター、2004年)

ハンス＝イェルク・ウターは、2004年に『トンプソン索引改訂版』を全面改訂した書物——『ウター索引』——を出版した。『トンプソン索引改訂版』から既に40年以上が過ぎており、改訂は

徹底的であって、同書は全3巻、総計1400ページ以上に及ぶ。ウターはドイツ人であるが、使用された言語は世界最大の国際語として存在感を高める一方の英語である。新たに編纂されたこの索引では全体の分類体系が再考され、それまでとは位置づけが変わった伝承も多々あった。しかし、「眠り姫」伝承は変わらず整理番号410のままである。

該当の項目を見ると、話型の名称としてまず英語が記され、つづいてドイツ語とイタリア語の名称が記されている。フランス語による周知の版の名称「眠れる森の美女」が欠けているが、理由は不明である(ATU, 1, 245)。

つぎに物語構造が説明される。トンプソンの『民衆文学の構成要素索引』に収められた伝承の構成要素(モチーフ)も参照指示されている。この索引は同一著者による『トンプソン索引改訂版』でも活用されていたものであるが、『ウター索引』においてはこれが整理され、簡略化されている。

カエルによる告知(B211.7.1., B493.1.)王と女王に一人娘が生まれる。ひとりの仙女(賢女)が饗宴(洗礼)に招かれず、呪いをかける。曰く、王女は(15歳の誕生日に)紡錘に傷つけられて死ぬことになる(F361.1.1, F316, G269.4, M341.2.13.)別の仙女が、この死の宣告を長期間の(100年にわたる)眠りに変える(F316.11.)

王は領内の紡錘(針)すべてを破壊させる。しかし一台だけ見逃されてしまい、これによって予言が成就する(M370)王女は隠れ部屋で糸を紡いでいたひとりの老女に出会い紡錘で指を刺す。すると王女は宮殿の全体とともに魔法の眠りに落ちる(D1364. 17, D1960.3, F771.4.4, F771.4.7.)城の周りで茨の生け垣が生い立つ(D1967.1.) (娘は塔のなかに閉ざされる)

折しも定めの時が過ぎ、ひとりの若者(または王子)が生け垣を突破し(N711.2.)、口づけによって王女を目覚めさせる(D735, D1978.5) (若者(または王子)が王女を孕ませ、王女がふたりの子供を産んだ後、子の片方が王女の指から繊維を吸い出して、それによって魔法が解けるというものもある)

いくつかの版では、王子が妻となった王女と子供を家族に加える 王子が不在の際、悪い姑は、王女と子供たちを屠殺して焼くようにと料理人に命じる 料理人は従わず、悪い姑は3人を有毒なひきがえりと蛇の詰まった樽に放り入れるようにと要求する 予期せず王子が帰還し、姑はみずからこの樽に飛び込んでしまう。

(同上)

先に、『トンプソン索引改訂版』においては『ボルテ=ポリーフカ改訂注釈』における物語構造の説明が英訳されて採用されていること、つまりそれが「眠り姫」伝承の話型一般の説明ではなく、ドイツ語版の「いばら姫」の説明に限定されていたことを指摘した。ウターによる物語構造の説明においてはそれが是正され、「眠り姫」伝承の話型はより一般化した包括的記述を与えられている。補足的な説明も多いが、それでもなおすべての版に適合するとは言えない。アール

ネとトンプソンによって築かれた伝承の分類体系は、ウターによる発展を経ても、その弱点が完全に解消されたわけではない。

項目「注」が次に記述される。

「特徴的な構成要素が14世紀のロマンス諸語文学に見られる。フランス語による『バルセフォレ』、そしてカタロニア語による「フライレ・デ・ジョイとソル・デ・プラセール」である。バジールによる『ペンタメローネ』（5日目第5話）やシャルル・ペローによる「眠れる森の美女」も参照のこと」（同上）。

現在の研究動向に即して、ロマンス諸語圏の文学的伝統が強調されている。

つづく項目「文献」において、ウターは「眠り姫」伝承の主要な研究を刊行順に列挙している。いずれの文献も重要なものであるが、日本ではあまり知られていないため、以下、ごく簡単な紹介を付け加えたい⁽¹⁾。

最初に、本稿で取り扱った『ボルテ＝ポリーフカ改訂注釈』の項目「いばら姫」の（ドイツ語、1913年）が挙げられている。続くのは後述する『メルヘン小事典』収録のゴルターによる項目「いばら姫」（ドイツ語、1930-1933年）である。アルフレート・ロマインによる論文「グリムのメルヘン「いばら姫」の形象」（ドイツ語、1933年）、ヤン・ド＝フリースによる論文「いばら姫」（ドイツ語、1958年）、マックス・リュートティによる『昔あるところに——民間メルヘンの本質について』（ドイツ語、初版1962年）の「いばら姫」解説という3点は、現在でもよく参照される。P・L・トラヴァースによるエッセイ風の研究『眠り姫について』（英語、1977年）につづき、イタリア語圏の「眠り姫」を考察の中心に置いたジョヴァンナ・フランツィとエステル・ザーゴの『眠り姫——ある物語の生成と変容』（イタリア語、1984年）の名が挙がる。つづくハインツ・レレケの論文「神話と英雄伝説に対するメルヘン「いばら姫」の位置づけ」（ドイツ語、1984年）は短いエッセイであるが、20世紀後半のグリム研究を代表する著者が、「眠り姫」伝承についてのドイツの研究史を批判的に総括している。フーリオ・カマレーナ＝ラウシリカによる論文「イベリア半島とイベロ＝アメリカの口承における眠り姫」（スペイン語、1985年）は、のちに——ネーマンによる解説との関係で——改めて言及する。ペロー研究の権威であるジャック・バルシロンによる論文『「バルセフォレ」における「眠れる森の美女」の物語』（フランス語、1990年）は、『バルセフォレ』に収められた「眠り姫」伝承の簡潔な解説である。ヴァルター・シェルフによる2巻本の『メルヘン辞典』（ドイツ語、1995年）に収録された項目「眠り姫」「眠れる森の美女」「太陽と月とターリア」「忠実な召使い」（ボンベオ・サルネッリ著）は、アールネ＝トンプソン＝ウター索引の前述した弱点に意識的である。トン・デッカー、ユリヤン・ファン＝デア＝コーイ、テーオ・メーダによる『アラジンから黄金の鷲鳥まで——起源・発展・諸本についての民間伝承事典』収録記事「いばら姫」（オランダ語、1997年）はオランダ語圏からの報告である。『レート索引』（ドイツ語、1998年）——本稿で先に考察したのは同書の改訂版であり、目下考察している『ウター索引』と同じく2004年に刊行された——の名も挙げられる。ギリシアからの報告であるマリーナ・パパクリストファーロウの『ギリシアのおとぎ話のなかの眠りと時計』（フ

ランス語、2002 年)、アラビアの伝承についての報告であるウルリヒ・マルツォルフとリシャルト・ファン・レーウエンによる『千夜一夜物語百科事典』(全2 巻、2004 年、英語)が続く。最後は、本稿でもあつかうハロルド・ネーマンによる『メルヘン百科事典』第12 巻——2004 年に『ウター索引』が刊行された時点では編集中であった——収録項目「眠り姫」(ドイツ語、2007 年)である。

これらの重要文献への参照指示に続いて、最重要項目と言える「諸版」が掲載される。さまざまな言語による「眠り姫」の版が、それを含んだ文献指示によって示されている。編者の姓と出版年を合わせた略式の一覧であるが、本稿では検索の便宜を高めるために、同書全3 巻の最後の巻に収められた「書誌と略号」(ATU, 3, 29-131)に即し、これを通常の文献表として提示する。以下、版の報告された地域名につづいて書誌情報を示す⁽²⁾。

- (リヴォニア) Loorits, Oscar (1926): *Livische Märchen- und Sagenvarianten* (FF Communications 66), Helsinki.
- (ラトヴィア) Lettisch: Arājs, Kārlis/Medne, Alma (1977): *Latviešu pasaku tipu rādītājs*, Rīga.
- (リトアニア) Kербелытэ, Bronislava (1999ff.): *Lietuvių pasakojamosios tautosakos katalogas* 1-4, Vilnius 1999/2001/2002/forthcoming, 1 (1999).
- (スウェーデン) Liungman, Waldemar (1961): *Die schwedischen Volksmärchen*, Berlin.
- (ノルウェー) Hodne, Ørnulf (1984): *The Types of the Norwegian Folktale*, Oslo, Bergen, Stavanger, and Tromsø.
- (アイルランド) Ó Súilleabháin, Seán/Christiansen, Reidar Thorwald (1963): *The Types of the Irish folktale* (FF Communications 188), Helsinki.
- (フランス) Delarue, Paul/Tenèze, Marie-Louise (1964ff.): *Le Conte populaire français. Catalogue raisonné des versions de France et des pays de langue française d'outre-mer* 2-4,1/ [2], Paris 1964/1976/1985/2000. [Bd. 4 [2] avec la collaboration de Josiane Bru], 2 (1964).
- (スペイン) Camarena, Julio/Chevalier, Maxime (1995): *Catálogo tipológico del cuento folklórico español. [1] Cuentos maravillosos; [2] Cuentos de animales; [3] Cuentos religiosos, [4] Cuentos – Novela; [5] Cuentos de ogro estúpido* (de próxima publicación). Madrid 1995/97/2003/2003/de próxima publicación, 1 (1995).
- (カタロニア) Oriol, Carm/Pujol, Josep M. (2003): *Índex tipològic de la rondalla catalana*, Barcelona.
- (ポルトガル) Braga, Teófilo (³1987): *Contos tradicionais do povo português* 1-2, Lisboa, 1 (1987), 90ff.; Cardigos, Isabel (2006): *Catalogue of Portuguese Folktales* (FF Communications 291), Helsinki.
- (フラマン) Meyer, Maurits de (1968): *Conte populaire flamand* (FF Communications 203), Helsinki.

- (ドイツ) Ranke, Kurt (1955ff): *Schleswig-holsteinische Volksmärchen* 1-3, Kiel 1955/1958/1962, 2 (1958); Tomkowiak, Ingrid (1993): *Lesebuchgeschichten. Erzählstoffe in Schullesebüchern 1770-1920*, Berlin & New York, 313; Brüder Grimm (1996): *Kinder- und Hausmärchen* (Märchen der Weltliteratur) 1-4. Ed. Hans-Jörg Uther, München, 1 (Nr. 50) und 3 (Nr. 163); Bechstein, Ludwig (1997): *Märchenbuch*. Nach der Ausgabe von 1857, textkritisch revidiert und durch Register erschlossen. Ed. Jörg Uther, München, Nr. 52, München.
- (オーストリア) Pramberger, Romuald (1946): *Märchen aus Steiermark*, Seckau, 40ff; Haiding, Karl (1953): *Österreichs Märchenschatz. Ein Hausbuch für Jung und Alt*, Wien, Nr. 31.
- (イタリア) Aprile, Renato (2000): *Indice delle fiabe italiane popolari di magia* 1-2, Firenze, 2.
- (マルタ) Mifsud-Chilrcop, George (1978): *Type-Index of the Maltese Folktales in the Mediterranean Tradition Area* (Diss), Valletta.
- (ハンガリー) Dömötör, Ákos (1988): *A magyar tündérmesék típusai. (A magyar állatmesék katalógusa 2, MNK 2) (AaTh 300-749)*, Budapest.
- (スロヴェニア) Flere, Pavel (1931): *Pravljice*, Ljubljana, 8ff.
- (クロアチア) Valjavec, Matija (1890): *Narodne pripovjesti u Varaždinu i okolici*, Zagreb, ne. 18.
- (ボスニア) Krauss, Friedrich Salomo (2002): *Volkserzählungen der Südslaven. Märchen und Sagen, Schwänke, Schnurren und erbauliche Geschichten*. Hrsg. Von Raymond L. Burt, Walter Puchner. Wien, Köln & Weimar, Nr. 33.
- (ブルガリア) Коцева, Иорданка: (2002): *Вълшебните приказки в Архива на Института за фолклор. Каталог. В: Български фолклор* 28 (2-4), 59-108.
- (ギリシア) Αγγελοπούλου, Άννα/Μπρούσκου, Αίγλη (1999): *Επεξεργασία παραμυθιακών τύπων και παραλλαγών AT300-499* 1-2, Αθήνα.
- (ポーランド) Krzyżanowski, Julian (1962f): *Polska bajka ludowa w układzie systematycznym* 1-2. Wrocław et al. 1962-1963, 1 (1962).
- (ロシア) Баран, Л.Г./Березовский И. П./Кабашников К. П./Новиков Н. В. (1979): *Сравнительный указатель сюжетов. Восточнославянская сказка* [SUS], Ленинград.
- (ユダヤ) Haboucha, Reginetta (1992): *Types and Motifs of the Judeo-Spanish Folktales*. New York & London.
- (ジプシー) Benedek, Katalin (2001): *Magyar népmesekatalógus. Összefoglaló bibliográfia. 1: Cigány mesemondók repertoárjának bibliográfia* (Angyal Katalin és Cserbák András közreműködésével). *(A magyar állatmesék katalógusa 1-1, MNK 1, 1)*, Budapest.
- (パレスチナ) El-Shamy, Hasan. M. (2004): *Types of the Folktale in the Arab World. A*

Demographically Oriented Tale-Type Index, Bloomington.

- (サウジアラビア) Fadel, Ayten (1979) *Beiträge zur Kenntnis des arabischen Märchen[s] und seiner Sonderart* (Diss), Bonn, Nr. 39.
- (インド) Thompson, Stith/Roberts, Warren E. (1960): *Types of Indic Oral Tales. India, Pakistan, and Ceylon* (FF Communications 180), Helsinki; Jason, Heda (1989): *Types of Indic Oral Tales. Supplement* (FF Communications 242), Helsinki.
- (ミャンマー) Касевич, В.Б./J. Осипов, Ю. М. (1976): *Сказки народов Бирмы*, Москва, № 71, 163.
- (フランス語カナダ) Delarue/Tenèze (1964ff.), 2 (1964)
- (アメリカ合衆国) US-Amerikanisch: *Western Folklore* 40 (1981), 236f.
- (ドミニカ共和国) Dominikanisch: Hansen, Terrence L. (1957): *The Types of the Folktale in Cuba, Puerto Rico, the Dominican Republic, and Spanish South America*, Berkeley & Los Angeles.
- (ブラジル) Cascudo, Luís da Câmara (1955): *Trinta “estórias” brasileiras*, Lisboa, 144ff.
- (チリ) Pino Saavedra, Yolando (1967): *Folktale of Chile*, Chicago, No. 16.
- (エジプト) El-Shamy, Hasan. M. (2004)

(同上, 245-246.)

『ウター索引』の目的はカタログ化であるから、これらの諸版を考証しているわけではない。編者であるウターは1996年に『典拠・注釈・文献一覧——グリム兄弟『子供と家庭のメルヘン集』』と題する書物を出版したが、これはグリム兄弟の「いばら姫」を集中的に論じ、他の「眠り姫」伝承との関係を詳しく扱っていない (Uther 1996, 99-102)。同書は改訂増補され、『ウター索引』刊行後、『グリム兄弟の『子供と家庭のメルヘン集』小事典』として再刊されているが (2008年)、編集方針は同様である (Uther 2008, 117-122)。

『ウター索引』で提示された諸版の考察は、今後の成果に委ねられている。後に扱う『メルヘン百科事典』におけるハロルド・ネーマンの項目「眠り姫」はその一つであった。

3 『メルヘン小事典』と『メルヘン百科事典』

『メルヘン小事典』(ヴォルフガング・ゴルター、1930-1933年)

『メルヘン小事典』は、ヴァイマル期に叢書「ドイツ民俗学小事典」の一著作として分冊刊行された。分冊第1巻分が1930年から1933年にかけて刊行されて完成したものの、第2巻分は1934年から1940年にかけて刊行され、第二次世界大戦のさなか「G」の項目途中で途絶した。

第1巻の扉には「編——ルッツ・マッケンセン、監修——ヨハネス・ボルテ、協力——専門家

諸氏」という記載がある（HdM, 1, 3）。編者のマッケンセンは、1933年にナチス黨員となった人物である。ボルテは『ボルテ＝ポリーフカ改訂注釈』の主導的な著者である。前述のとおり、ボルテとポリーフカはグリム兄弟の見解に対して冷静な距離感をもっていた。そのボルテが監修者であるにも関わらず、『メルヘン小事典』はグリム兄弟が構築した研究枠組みに倣おうとしている。たとえば第1巻の初めに掲げられている「グリムのメルヘン概観表」（同上, 1-7）という一覧がある。そこには、グリム兄弟が収集したメルヘンが一覧として並べられており、それぞれのメルヘンの参照先として、各種レファレンス・ツールが併記されている。『ボルテ＝ポリーフカ改訂注釈』の項目、『トンプソン注釈』⁽³⁾における番号、当時よく使用されたフリードリヒ・フォン・ライエンによるメルヘン番号、そして『メルヘン小事典』自体の見出し語である。巻末に掲げられているのは、カール・カイザーが執筆を担当した「取り上げられたメルヘン素材——グリムの『メルヘン集』に準拠した索引」と名付けられた一覧表である（同上, 637-659）。

「眠り姫」の項目はドイツ版の名前「いばら姫」であるが、これは現代のドイツ語圏においても広く「眠り姫」の一般的なドイツ語名と見なされている。項目の著者はゲルマン神話・伝説や中世ドイツ文学、また初期のヴァーグナー研究の分野で多くの功績を残したヴォルフガング・ゴルターが担当している。このゴルターに対して、ハンス＝フリードリヒ・ローゼンフェルトは、「幅広くあろうと熱狂したがゆえに、つねに叙述が深みのあるものに到達していたわけではない」と辛口に寸評している（Rosenfeld 1964, 626）。それは措くとしても、ゴルターのこの「解説」は19世紀から20世紀前半にかけてドイツでなされた「眠り姫」伝承についての考察の典型例として注目に値する。

項目は基本的な情報提供から始まる。『アールネ索引』と『ボルテ＝ポリーフカ改訂注釈』⁽⁴⁾による物語構造が示され、トンプソンが『民衆文学の構成要素索引』で整理した構成要素（モチーフ）の索引が付け加えられている（Golther 1930-1933, 408-409）。続いて次のように指摘される。

「カッセルの町のヴィルト家に住んでいたマリーによって語られたメルヘンは、ペローの「眠れる森の美女」（1669年）とまったく一致するため、それが口伝えによる借り物であることはほとんど疑えない」（同上, 409）。

ボルテとポリーフカと同様、あるいは同時代の他のすべての研究者と同様に、ゴルターもグリム兄弟に「いばら姫」を提供した人物を別人と取り違えていた。ヴィルト家の老女マリーだと信じられてきた「マリー」なる提供者が、実は当時20歳前後だったマリー・ハッセンプフルークという若い女性だという事実が判明したのは、1975年のハインツ・レレケの研究によってである（Rölleke 1975, 74-86）。

しかし、ここで注目すべきは、ゴルターがドイツ版の「眠り姫」伝承をフランス版の「口伝えの借り物」だと見なしている点である。まるで「眠り姫」伝承がロマンス諸語圏を中心に伝えられてきたことを強調したボルテとポリーフカの見解が、ゴルターにも共有されていたかのように見える。しかし、ゴルターが見せる議論展開は独自のものである。

「この物語は1911年にグリムによってカッセルで採取されたのであり、このことから、こ

のフランスのメルヘン全体がドイツに引き継がれたのだと証明される」(同上)。

果たして「フランスのメルヘン全体がドイツに引き継がれた」とは何を意図した発言なのだろうか。またそれが「証明される」と言われるが、腑に落ちない議論である。

「ヴィルト家のマリーによる報告では、続きの部分は余計な補足に思われたために取り去られている。「いばら姫」と「悪い姑」にいかなる内的関係も存在しないから、研究水準にも適っている」(同上)。

ドイツ版の「眠り姫」伝承には、イタリア版やフランス版にあった後半部分が欠けている。それをゴルターは肯定的に評価するのであるが、「余計な補足に思われた」というのはゴルターの推測でしかない。また、それが「マリー」にとってであるか、グリム兄弟にとってであるかは明確に語られない。

次いで、ゴルターは名前の問題に論を進める。

「いばら姫という名前は、グリュフィウスによる1660年作の喜劇において「愛しの茨」として現れる。ドイツのメルヘンは、薔薇の仲間であるサンザシやロサ・コリンビフェラを念頭において、生け垣の薔薇からこの名を導いた。アルブレヒト・フォン・シャルフェンベルクの「ムンディローザ(世界の薔薇)」とフィレンツ版の「ローザ(薔薇)」がフランス語の「ロサ(薔薇)」という名前に通じているものの、それが「眠れる森の美女」と関係しているかどうかは、断定できない」(同上)

挙げられている事例は『ボルテ=ポリーフカ改訂注釈』と同じである。だが、ゴルターはロマンス諸語圏の諸版とドイツ語圏の古典的作品との関係を結論できずにいる。

次いで、このように展開される。

「グリム兄弟とベヒシュタインによって、ドイツにおいて稀なほどに国民的な存在となったこのメルヘンの成立年代と起源は論争的である」(同上)。

ベヒシュタインのメルヘンはグリム兄弟の『メルヘン集』が権威として確立する以前、グリム以上の人気を誇ったとも言われるが、「いばら姫」はグリム版に準拠した版である(Bechstein 1846 220-223)。いずれにしても両者によって「いばら姫」は数あるメルヘンを越えて「稀なほどに国民的な存在」になったことが確認される。引き続いて「眠り姫」伝承の起源についての諸見解が提示される。ゴルターの主張を支える基礎であるため、長大ではあるが引用したい。

「ヤーコプ・グリムはつぎのように述べた。「茨の生け垣に囲まれた城にいる乙女が、真正の王子によって救い出される。王子を前にして茨は自ら道を空ける。乙女は古ノルド語の伝説の炎の壁に封じられた眠れるブリュンヒルドである。シグルズだけが炎の壁を突破できる。紡錘の針はいばら姫を刺して眠らせるが、それはオーディンがブリュンヒルドを刺した眠りの棘なのである」。ホイスラーによると、炎の壁はブリュンヒルドに対する求婚の物語に結びつく。彼女は盾の城塞のなかで眠る半女神ヴァルキューレである。盾が直立して隙間なく並んだ円形の柵に城塞が収まっている。戦場の防御側によく見られるように。ゆえに炎の壁といばらの生け垣を比較するのではなくて、盾の城や垣や檻といばらの生け

垣を比較してよい。盾の城塞への侵入は『エッダ』では特別な試練として描写されない。それにもかかわらず、選ばれた者だけが眠れる者を発見して目覚めさせることができるという点、そして生け垣の乗り越えと盾の城塞の乗り越えという点で両者は同一であると推測できる。パンツァーは目覚めさせられたヴァルキューレといばら姫の関係を否定し、「愛らしいいばら姫はジークフリート伝説の物語から乖離していることを証明した」。ペッチュは正当にも、ふたつの伝説の関係性をふたたび肯定したが、それはグリムとは違ったようにであった。つまり、目覚めさせられたヴァルキューレがいばら姫のなかに転生したのではなく、逆にメルヘンの方がノルド語の伝説の土台だったと言うのである。ホイスラーによると「いばら姫というメルヘンは、英雄的なものへと移植され」、ノルド語のオーディンについての詩に結びつけられた」（同上）。

ゴルターの記述は錯綜している。とはいえ、諸説をならべるゴルターが、どのような立場にあるのかは明らかである。グリム兄弟と同様にゲルマン神話との関連を主張した人物としてペッチュが紹介され、「正当にも」と形容されるからである。つまりゴルターはグリム兄弟の主張に倣おうとしている。ただし、ペッチュはグリム兄弟とは「違ったように」考察した。グリム兄弟はドイツのメルヘンにゲルマン神話の派生を見たが、ペッチュはそれを転倒させて、実はメルヘンが先行し、それが英雄伝説を生み出したと主張する。続けて紹介されるホイスラーの説も、この点でペッチュと同様である。これにゴルターは反駁する。

「おそらくこのメルヘンとジークフリート伝説の結びつきは、すでにフランク族の土地で、すなわち6世紀において発生した。ジークフリート伝説が古フランクのメルヘンを創出し、それがまず14世紀にフランス語版である『ペルセフォレ物語』とカタロニア語の詩「フレイレ・デ・ジョイ」の姿をとって現れる。かくして古典的でありながら終局でもあり、さらにはドイツにとって決定的である形態がペロー版に保存された」（同上、409-410）。

ここにいたって、グリム版をペロー版の「口伝えの借り物」でありながら、それによって「フランスのメルヘン全体がドイツに引き継がれた」と述べた際、ゴルターが念頭に置いていた図式も明らかとなる。ゴルターはまずグリム兄弟と同様にゲルマン神話を伝承の出発点と見なす。だが、さらに独自に、その神話世界がゲルマン系のフランク族の許でメルヘン形式による「眠り姫」を成立させたと想定する。

ゴルターが空想した図式を補足すると、彼が念頭においているのは、フランク王国（5世紀に成立）がゲルマン系の国家であり、かつそれは後にフランス・ドイツ・イタリアに該当する地域に分裂した（9世紀）という周知の歴史的事実である。この歴史的事実を念頭において、ゴルターはゲルマン系の神話とメルヘンから発生した「眠り姫」伝承がロマンス諸語圏を中心に広まったことは不可解ではないと想像している。

いずれにせよ、かくしてゲルマン系の伝承はフランスやカタロニアといったロマンス諸語圏において再現され、17世紀末のペローによるフランス版に至る。「古典的でありながら終局でもあり、さらにはドイツにとって決定的である」版として。それは語り手の「マリー」とグリム兄弟

をつうじて「ドイツに引き継がれた」。表面的にはフランスからの「借り物」のようではあっても、それは本質的には帰郷である。ゲルマン神話からゲルマン国家のメルヘンへ、そしてロマンス諸語圏における展開をくぐり抜け、再びゲルマン系のドイツ人の許へ。そのような神話論的・ロマンス主義的空想にゴルターは没入する。

これは『ボルテ＝ポリーフカ改訂注釈』で示されたいばら姫の起源に対する見解への応答でもある。ボルテとポリーフカはグリム兄弟らによって主張された「眠り姫」のゲルマン起源説に対する懐疑を表明していた。ゴルターはそれに反駁している。

ゴルターはつづける。

「1637年のバジーレによる『ペンタメローネ』は、すでに異質な付属である「悪い姑」を提示していた。古きフランク族のメルヘンにも新しきドイツ人のメルヘンにも欠けたものである」(同上、410)。

「古き」フランク族を起点とし、「新しき」ドイツを終点とした一本の系譜が基準線をつくり、バジーレ版は——ペロー版とともに——逸脱したものと思なされる。ロマンス諸語の版に見られる結婚後の展開は不純物でしかない。だが、フランク族のメルヘンがそもそもゴルターの想像の産物でしかないから、その空想上の版に結婚後の展開がないというのも、ゴルターの空想である。

ゴルターは続ける。

「眠りの棘は、亜麻の繊維よりもさらに古いと思われる」(同上)。

ゲルマン神話において主神オーディンがブリュンヒルドを眠らせる「眠りの棘」は、ゴルターにとって、バジーレ版において姫のターリアを眠らせる「亜麻の繊維」よりも古いものだと「思われる」。ここでもゴルターの主観により、バジーレ版がゲルマン神話からの派生物であると位置づけられる。

ゴルターは入念にみずからの主張の要点を提示する。

「われわれが他の時代・場所から手に取るすべての版は、内容において『エッダ』といばら姫の中間形態である」(同)。

その実例も紹介される。

「アラビアのメルヘンにおいて、一人の女が娘を願うのだが、彼女もまた亜麻の香りによって死ぬ！」(同)

事典のなかの項目という客観的な記述が求められる文章であるのに、あえて感嘆符が使われており、ゴルターの興奮と歓喜がよく伝わってくるが、それは本当に『エッダ』とグリム版の「中間物」なのだろうか。ゴルターの解説を見てみよう。

「女は現実にならねど、娘が成長する。娘はひとりの老女から繊維を磨くように唆される。すると繊維が指に入り込み、死んで倒れる。河のなかに柱の宮殿が建てられる。内部のベッドに眠れる少女が休らう。老女は、王子が娘を娶るようにと運命づけており、その王子が来る。死んだように見える娘を王子は悼む。繊維を見つけて抜き取ると、眠り姫は生命を取り戻す。この版の報告の冒頭部は、予言と呪いがもつれて混乱している。だがすべての

特徴は容易に察せられる。待望された娘、亜麻に対する警告、侵入した繊維による仮死、寝台のある接近困難な城、そして解放者が指から繊維を取り去ることで魔法が解ける点」（同）。

この版が『エッダ』とグリム版の中間物であることを証明する要素は示されていない。だがゴルターは書く。

「バジーレ、『ペルセフォレ』、カタロニア語の詩、イタリアで採取された諸版は、新規の魔法の解け方を提示している。英雄が鳥に助けられて城に到着する。そして眠り姫を目覚めさせずに抱く。子供たちが生まれた後に、眠り姫は目覚める。子供たちは母親の指を吸い、亜麻の繊維を抜くのである。ここには、別のメルヘンとの融合が現れている。そうしたメルヘンでは、恋する男が鳥の姿になるか、鳥に乗って相手を探し求め、塔のなかに捕われた相手を見つける。いずれにしてもそれは後世の改変である。本質的であるのは、それらのメルヘンでも亜麻の繊維によって魔法に掛かり、繊維がなくなって魔法が解けるということである」（同）。

ゴルターは助け手としての鳥という物語の構成要素に注目しつつも、それは「後世の改変」であると見なす。逆に、ゲルマン神話の「眠りの棘」から派生したものと見なされる「亜麻の繊維」こそが「本質的」であると言う。

ゴルターは起源をめぐる考察の最後に、「眠り姫」のメルヘンの起源に関する諸説が「すべて根拠薄弱」だと述べる。だが、それでもゴルターの主張がどこにあるのかは簡単に察せられる。これも長大であるが、重要であるため引用する。

「ウーラントはこのメルヘンの起源を、解放者が死（すなわち魔法の眠り）に捕われた者を解放するなら、彼らは結婚せねばならないという古い法慣習に見た。シュピラーはインド起源を信じた。太陽神スーリヤの高貴な娘がそれであり、すなわち太陽神話である。フォークトは比較対照として、タレイアについての古い神話を引き合いに出す。ゼウスが愛人タレイアを妻のヘラから隠すものである。しかし、この型式は追加部分である悪い姑ないし嫉妬深い妃の物語にのみ符合する。これでは本来の「眠り姫」伝説は解明できない。ザオバートは四季の神話をみた。フレイが巨人の娘ゲルズに求婚した伝説に似ており、炎の壁を騎行によって越えるという類似点を示した。春、太陽神が死の眠りとしての冬に陥った処女の大地に口づけする。『エッダ』の「スヴィプダーグの歌」も引き合いに出すことができる。そこでは英雄が炎の壁を越えて女神メングレズの城へと駆け上がる。だが私たちが常にたどり着くのは、城塞の美しい女領主をめぐる救済または求婚というきわめて普遍的な物語のみである」（同上、410-411）。

ウーラントによる古代の法慣習との関連づけやシュピラーのインド起源説は短く言及される。ゴルターの見解とは相容れないものの、ある程度容認されうる見解だったのであろうか。

対してギリシア神話起源説ははっきりと否定されるが、有力な対立的見解と考えられたのであろうか。ギリシア神話では女神「タレイア」がゼウスの子供を身ごもり、出産する。バジーレ版

の「太陽と月とターリア」では、眠り姫「ターリア」が睡眠中に将来の夫に強姦され、眠りながら子供を産む。物語と名前の共通点は考察されてもよいはずであるが、ゴルターはここでバジール版の眠り姫の名前について口を閉ざしている。ギリシア神話でタレイアがゼウスの妻ヘラから迫害されるという点だけが注目され、先に「眠り姫」伝承とは「いかなる内的関係も存在しない」し「本質的」でもないと思なされたイタリア版やフランス版の後半部との一致だけが指摘される。

逆に、ゲルマン神話におけるフレイのゲルズに対する求婚物語や、『歌謡エッダ』の「スヴィブダーグの歌」は肯定的に紹介され、「私たちが常にたどり着く」起源が、「城塞の美しい女領主をめぐる救済または求婚」であって、それは「きわめて普遍的な物語」だと述べられる。

その後、ゴルターは「眠り姫」伝承ないしグリム兄弟の「いばら姫」の「起源が不明にとどまる」と強調するが、彼の主張はあまりに明白である。

ゴルターは、19世紀前半にグリム兄弟がそうであったように、20世紀前半において「眠り姫」のように眠りの森でまどろんだ。だが、それは兄弟やゴルターの特例とは言えない。ゴルターが肯定的に言及したグリム兄弟の後継者たちにも共通する特徴であった。

『メルヘン百科事典』（ハロルド・ネーマン、2007年）

すでに述べたように、第二次世界大戦のさなか、『メルヘン小事典』の刊行は第2巻が完成することなく途絶した。これを受け継いだのが、1977年以降、現在（2013年）に至るまで刊行されている『メルヘン百科事典』である。

『メルヘン百科事典』の第1巻に収録された序文「メルヘン小事典の編者・編集部」には、つぎのように書かれている。——「当初、出版社はメルヘン小事典の継続を望んだのであるが、この国民志向でテーマ上の限定も多い企画の枠組みを引き継ぐのは、さして意義なく思われた」（EM, Bd. 1, VII）。そのような事情から、戦後の『メルヘン事典』は戦前の『メルヘン小事典』とは対照的に、国際的な性質を備えたものとして発刊した。

ただし、この百科事典の企画を立ち上げた中心人物は注目に値する。それはナチスが政権を取る以前の1932年からナチス黨員として活動した文献学者・民俗学者のクルト・ランケである。ドイツが敗戦を経験し、冷戦激化のなかで非ナチ化政策も終わった後、斯界の重要人物として華々しく復活を遂げた。1957年にキールに、1961年以降はゲッティンゲンに『メルヘン百科事典』の編集部を置き、国際的な伝承研究における主導的地位を維持した（Uther 2003, 145-146）。

『メルヘン百科事典』は、現代において『ウター索引』と並び、メルヘン研究にとどまらず口承文芸研究全体においても最も権威あるレファレンス・ツールと見なされる。同様にこの分野の権威的な雑誌「ファビュラ」や同じく権威的な学会である国際口承文芸学会（ISFNR）も、やはりランケによって設立されたものである。とはいえ、それは『メルヘン百科事典』、「ファビュラ」、国際口承文芸学会が関わる口承文芸研究の価値を貶めるものではない。

「眠り姫」伝承についての項目は、2007年に刊行された第12巻に収録されている。著者のハ

ロルド・ネーマンは、この巻の出版後、2010年6月5日に51歳の若さで亡くなった。地方紙の計報は、ネーマンがドイツ北部に生まれ、フランスの言語と文化を専門的に学んだロマニストであること、アメリカ合衆国西部のワイオミング大学でドイツとフランスの伝承研究に従事したこと、文化の多様性を深く理解した人物として評価されていたことを伝える（L-B, Friday, June 11, 2010）。

項目「眠り姫」は、つぎのように始まる⁽⁵⁾。

「眠り姫（整理番号 410）——魔法メルヘンであり、魔法にかけられた乙女と、その救出をあつかう」（Neemann 2007, 13）。

ネーマンはまず「眠り姫」伝承を前半部と後半部に分割する。

1) 待望された(時には動物によって予言された)とある(王の)娘の誕生に際して、12人の(または6人の)仙女が招かれる。もうひとりの仙女がいるが、忘れられてしまう。この仙女は復讐するべく、王女が15歳の誕生日に紡錘の針によって死ぬと予言する。この呪いは、残った仙女によって100年の魔法の眠りに弱められる。予言を防ぐための措置が講じられるが、それは実らない。多くの解放者が眠り姫の許に押し寄せるが、成功を収められない。ある王子が到着して王女は目覚める。すべての障害物は道をゆずる。この王子は100年の魔法が終わるその時にやってきたからである。(王子の口づけによる救済、あるいは王子と眠る少女の同衾)。

2) 王子(または王)は主人公の眠り姫と秘密の愛で結ばれる。眠り姫が子供を二人産む。姫と子供たちは、王の母親(または妃)によって生命を脅かされる。

(同上)

ネーマンは「眠り姫」伝承の現れる文学ジャンルを神話、中世文学、メルヘンという3つに分割する。だが、それらの連続性は明確に主張されない。ネーマンは神話を起源として主張せず、慎重に述べる。

「運命物語に属するこの物語型式にはさまざまな要素が含まれるが、それらはギリシア・ローマの神話や古ノルド語の神話に見られる。「眠り姫」伝承の後半部は、タレイア伝説の残響を含む。妻のヘラを恐れる大神ゼウスはターリアを隠し、ターリアはゼウスの子である双子を産む。しかし、「眠り姫」伝承は、古ノルド語の「シグドリーヴァの歌」を想起させる。そこではシグルズがヴァルキューレのシグドリーヴァを再び目覚めさせる。シグドリーヴァは、戦闘において反逆的な介入をおこなったことで主神オーディンによって罰せられ、魔法の眠りに落ち、楯でできた城塞(または炎の壁)に囚われる。あらゆる英雄のなかで最も恐れ知らずの者だけが、これを突破する運命にある」(同上)。

つづいてネーマンは中世文学に言及する。

「死に似た眠り（「白雪姫」伝承を参照せよ）という構成要素、「眠り姫」伝承の初期の諸版

に見られる英雄の手助けをおこなう鳥という構成要素は、中世においてさまざまな話者が手を付けたものである。マリー・ド・フランスの「エリドゥック」と「ヨネック」などである」(同上)。

ゴルターは——のみならず現在にいたるまで多くの論者は——「眠り姫」伝承において助け手としての鳥という要素を主要なものとは見なさなかったが、ネーマンはそのような立場を取らない。解説は周知の版に移る。

「『眠り姫』伝承の展開は、13・14世紀まで追跡できる。最初期の版が示すのは、作者不明の『ペルセフォレ物語』におけるトロワリュスとゼランディースの物語である(1320-40年頃、46、48、55章)。詩「コーンウォールのブランダン」(13世紀後半または14世紀前半)の第2部は同じ主題に基づいており、さらには呪いによって起こる少女の魔法の眠りおよび助け手としての鳥という構成要素も見られる。この2つの作品において「眠り姫」伝承は一挿話を成すにすぎないが、カタロニア語による詩「フライレ・デ・ジョイとソル・デ・プラセル」(14世紀)は呪いという構成要素を欠くものの、独立したひとつの版である」(同上)。

「コーウォールのブランダン」は、『ペルセフォレ』や「フライレ・デ・ジョイとソル・デ・プラセル」に比べて言及される頻度がかなり低い版であるが、ネーマンはこれを挙げることで、「眠り姫」伝承の古い版で鳥が大きな存在感をもっていた事実を示している。

さらに「フライレ・デ・ジョイとソル・デ・プラセル」のあらすじが紹介され、バジール、ペロー、グリム兄弟によるメルヘン型式の版が考察される(同上、14)。まずバジール版の内容が要約され、その後半部ゆえにペローの版と「平行している」ことが確認される(同上、15)。

ネーマンはつぎのように書く。

「後半部におけるバジール版との主な違いとして、ペロー版においては王子が未婚である。父王の死後、ようやく王になり、眠り姫を宮廷に連れてくる。悪い妃だったのが、ここでは食人鬼の出自をもつ新王の母親である。前半部で仙女によって呪いがかけられるという構成要素はバジール版と異なっている」(同上)。

ネーマンはグリム兄弟の版を、書籍において読まれる「眠り姫」メルヘンのなかで「最も有名」とであると紹介し、周知の情報を追加する。

「英雄が到着し結婚式が開かれたあとの続きの部分は、グリムの『メルヘン集』においては分離され、「悪い姑」(断片5)という物語になっている」(同上)。

ここでネーマンは、多くの研究者が「眠り姫」伝承の口承による伝搬がかなり限定されたものであると指摘してきたことに注意を促す。ここからの議論はネーマンの記事の要所である。

「ステイス・トンプソン、ヤン・ド・フリース、M=L・テレーズによると、実際のところ「眠り姫」伝承が口承の民間伝承になったことは皆無だという。クルト・ランケの評価によると「このメルヘンがほとんど伝搬しなかったということは、グリムの『メルヘン集』が生きた民間の話芸に対して比較的限られた影響しか持たなかったことを意味する」」(同上、

15 - 16)。

このように定説をまとめるネーマンの意図は、別の見解を提示することにある。彼はこのように進める。

「フーリオ・カマレーナ＝ラウシリカは、これに対して、イベリア半島やイベロ＝アメリカの版が、バジール版を想起させる内容であるのに、直接バジールのナポリ方言イタリア語のメルヘン集に依拠しているとは思われない、と考える。というのは、バジール版は見たところスペイン語やカタロニア語やポルトガル語に翻訳されたことがないのである」（同上、16）。

翻訳がないという状況で、イベリア半島やイベロ＝ロマンス諸語圏で報告された版にバジール版との共通点が見られるということは、バジール版の「眠り姫」伝承が生きた口承となってそれらの地域に伝搬したということではないか。

ネーマンは続ける。

「カマレーナは、イベリア半島とイベロ＝アメリカの版およそ 17 種を 4 つに分類する。グリム版に準拠したもの、ペロー版に準拠したもの、バジール版に準拠したもの、そしてバジールの後半部だけを取り入れたものである」（同上）。

これらの版の多くでバジールの影響は濃厚であり、ペロー版の影響を持つものもある。そこでネーマンは述べる。

「イタリア、イベリア半島、イベロ＝アメリカの諸版には、バジール版の影響が明白である。イベリア半島とイベロ＝アメリカの版は、ペローの影響をも示している。フランス語圏アメリカの版は、同様にペロー版や、ペロー版を取り込んだ別のフランス語版に対応している。地理的条件ゆえに、フラマン語の諸版にはグリム兄弟の影響が、部分的にはやはりペロー版の影響がある」（同上）。

それ以外でも、ギリシア、アラブ世界、中東地域からかなりの量の口承の証拠が報告されている（同上）。文献としてカマレーナ＝ラウシリカの前掲論文以外には、以下のものが指示されている。——カマレーナとマクシム・シュヴァリエによる『スペイン語民間伝承の話型カタログ』（1995 年以降刊行、全 5 巻予定、未完）、イサベル・カルジゴスによる『ポルトガル語民間伝承カタログ』（2006 年）、カルメ・オリオールとジョゼブ・M・ブジョルによる『カタロニアおとぎ話の話型索引』（2003 年）、レナート・アプリーレによる『イタリアの魔法民間伝承索引』（2000 年）、ポール・ドゥラリュとマリー＝ルイーゼ・テネーズの大著『フランス語民間伝承——フランスおよび海外フランス語諸国における諸版についての解題つきカタログ』（1964-2000 年、全 4 巻）、『ウター索引』でも指示されていたヴァルター・シュelf の『メルヘン辞典』（1995 年）およびマリー＝レナ・クリストファーロウの前掲書（2002 年）、最後に『ウター索引』それ自体である。

ネーマンはさらに考証を進めて、

「「眠り姫」伝承の分類は、部分的に疑われる」（同上）

と記している。文献としてオルヌルフ・ホードネによる『ノルウェー民間伝承の話型』（1984年）とレフ・バラグによる『ベラルーシの民間メルヘン』（原文ベラルーシ語、1966年のドイツ語訳が使用されている）が指示されているが、その内容は説明されていない。重要な論点であると思われるので本稿ではこの2つの文献に依拠してネーマンが述べたかったことを明示しておきたい。

オルヌルフ・ホードネの書物はノルウェーで採取されたメルヘンのカタログである。採取された資料の一覧では、「眠り姫」伝承の報告事例は1件のみであるが（Hodne 1984, 366）、それは注目に値する。ホードネによるカタログ化は次のとおりである。

眠り姫——長く眠る少女

邪悪な姑が、嫁に対して超自然的な眠りをもたらし。彼女を目覚めさせる男が、約束された人物である。訪れた男が彼女の小指を切り落とすと、奇跡が成就する。

(Hodne 1984, 97)

ただちに理解されるとおり、このノルウェー版では、通常「眠り姫」伝承として知られているものが、別のメルヘンと融合している。アールネ＝トンプソン＝ウター分類体系における「眠り姫」の枠組みを基準にすれば、この版はキメラのような合成生物である。だが口承であったならば、そのような融合はごく普通に起こりうる。

他方、バラグの文献はカタログではなく解説付きのメルヘン収集である。「鍛冶屋」という名前が与えられたメルヘンが冒頭に収録されているのであるが（Barag 1966, 5-19）、そこでは「力持ちのハンス」（『ウター索引』整理番号 650A）や「忠義な動物」（『ウター索引』整理番号 554）を思わせる物語と「眠り姫」伝承が融合している（同上, 534）。これもまた合成生物のような風貌のメルヘンと言え、口承性を想像させる。それは1890年から1917年のあいだに、ミンスク郊外の村に住んでいた100歳の農民レートキイから採取され、1926年、アレクサンドル・カジミロヴィチ・セルジュプトヴスキーによるメルヘン集で出版されたものであるという（Barag 1966, 533-534）。

ネーマンは、ノルウェー版とベラルーシ版を文献指示することで、イベリア半島とイベロ＝アメリカから「眠り姫」の口承性を報告したカマレーナ＝ラウシリカと歩調をあわせて、「眠り姫」の口承性を否定する従来の通説に懐疑を示すとともに、アールネ＝トンプソン＝ウター体系の枠組みにも疑念を表したのである。

ネーマンは続ける。

「ロマンス語圏の外部においても、このメルヘンの口承版が証拠として提出されている」（同上, 16）。

ここで一連の文献が指示される。——前述したマリーレナ・パパクリストファーロウによる研究書（フランス語、2002年）、ロムアルト・プラムベルガーによる『シュタイアーマルク地方のメ

ルヘン』（1946年、ドイツ語）、カール・ハイディングによる『オーストリア・メルヘンの宝物』（1953年、ドイツ語）、マティヤ・ヴァリヤヴェツによる『ヴァラジュディンとその近郊の民』（1890年、セルヴォ＝クロアチア語）、ハイツ・モーデとアルン・レイによる『ベンガル語メルヘン』（1967年、ドイツ語）、F・B・ブランドリー＝パートによる『ベンガル語のおとぎ話』（1920年、英語）、ギヨーム・スピタ＝ベによる『近代アラビアのおとぎ話』（1883年、フランス語）、前述したウルリヒ・マルツォルフとリシャルト・ファン・レーウエンによる『千夜一夜物語百科事典』（2004年、英語）、ハサン・M・エル＝シャーミーによる『アラブ世界の民間伝承の話型——統計準拠の話型索引』（英語、2004年）である。

版に関する解説の最後にネーマンは付け加える。

「魔法の眠りという構成要素があるために、「眠り姫」伝承の口承による諸版は、ときとしてメルヘンの「白雪姫」に近い。ほとんどが救済と結婚式という形で幸福な結末を強調する」（同上、17）。

ネーマンのこの記事は、さらに「眠り姫」についての心理学的研究や各種メディア展開についても概観を与えているが、これは本稿の主題から外れるため割愛する。

ネーマンによる「眠り姫」記事の水準は、刊行された時点までの「眠り姫」伝承研究の総決算を示しており、模範的な解説と言えるだろう。記述は冷静慎重でありながら、伝承の背後に広がった汎欧州的・超欧州的な文脈が十分に踏まえられており、読者に刺激をあたえる。『メルヘン百科事典』に収められたこの前提として、さらに「眠り姫」伝承は現在も進められている。

結 語

本稿で取り上げたレファレンス・ツールは、「眠り姫」伝承をめぐる諸見解の歴史の見せる海をつくっている。その海の中では、互いに対立する見解が、お互いにお互いあいに、また全体としては奇妙な響きを放っている。ヴィルヘルム・グリムは「眠り姫」伝承の起源をゲルマン諸語圏に見出した。のちに後継者たちがグリム兄弟の見解を支持したが、一部の者たちは兄弟の見解に根本的に対立するベンファイのインド起源説を支持した。アールネ＝トンプソン＝ウター体系の基礎を築いたアンティ・アールネは、グリム兄弟を批判し、その「眠り姫」に関する見解は明らかでないものの、メルヘンの起源としてインドを重視する点でベンファイに近い立場であった。ボルテとポリーフカはグリム兄弟の仕事を継承する書物を刊行したが、兄弟の基本的見解を否定し、ロマンス諸語圏における多くの版を強調した。アールネの仕事に継承したトンプソンもロマンス諸語圏の版を伝承の中心を形成するものと見なし、レートもそれは同様である。だがアールネからトンプソンに引き継がれた仕事を発展させたウターは、「眠り姫」伝承の諸版についての魅惑的な書誌を提示する。ウター自身の解釈は不明であったが、この書誌に掲載された版は今後のさらなる研究の可能性を示している。ゴルターは1930年代に、ゲルマン神話とみずから想定

したフランク族のメルヘンが、グリム版に向けた系譜をもっていたという想像を披露した。2000年代のネーマンは、現代の研究を周到に押さえつつも、「眠り姫」伝承の口承性の問題を再考し、「眠り姫」伝承がロマンス諸語圏の伝統という枠組みには回収しきれないことを教えている。

〔付記〕2011年、ロシアのアグライア・スタロスティナは、欧州における最古の「眠り姫」伝承として知られる『ペルセフォレ』の挿話よりもさらに古い版が中国に存在したことを雑誌「ファビュラ」に報告した（Starostina 2011, 189-206）。本稿の筆者（横道）はこの版の日本への伝搬を調査し、遅くとも江戸時代初期には林羅山によって日本に伝えられたことを確認し、国際口承文芸学会で報告した（ISFNR 第16回大会、2013年6月29日、リトアニアのヴィルニウスにて）。これに関連した論文を現在執筆中である。

注

- (1) 原語での書誌情報は末尾の文献表を参照。以下も同様。
- (2) 参照した「書誌と略号」ではギリシャ文字およびブルガリア語・ロシア語のキリル文字がラテン文字に置き換えられている。本稿ではこれを原語に戻す。また散見された情報不足を補った。
- (3) 本稿であつかった『トンプソン索引改訂版』は1961年に刊行されたが、その初版——『トンプソン索引』——は1928年に刊行された。
- (4) 前述のとおり、『トンプソン索引改訂版』ではこのドイツ語が英訳されていた。
- (5) 事典という性格上、項目中には多くの鍵語が含まれ、それぞれが矢印によって他の項目への参照を指示している。有意義ではあるものの、煩雑を避けるため、本稿では割愛する。

文献表

欧語の参考文献

- Aarne, Antti (1910): *Verzeichnis der Märchentypen* (FF Communications 3), Helsinki.
- Aarne, Antti (1913): *Leitfaden der vergleichenden Märchenforschung* (FF Communications 13), Helsinki.
- Aarne, Antti/Thompson, Stith (1928): *The Types of the Folktale. A Classification and Bibliography* (FF Communications 184), Helsinki.
- [AaTh] Aarne, Antti/Thompson, Stith (1961): *The Types of the Folktale. A Classification and Bibliography* (FF Communications 184), Helsinki.
- Aprile, Renato (2000): *Indice delle fiabe popolari italiane di magia*, Firenze.
- Aulnoy, Madame d' (2004): *Contes des fées suivis des Contes nouveaux ou Les fées à la mode*. Édition critique établie par Nadine Jasmin, avec une introduction de Raymonde Robert, Paris.
- Barag, Lev. G. (1966): *Belorussische Volksmärchen* [Übersetzung der Märchentexte aus dem Belorussischen von Hans-Joachim Grimm. Übersetzung des Anhangs aus dem Russischen und Fachredaktion Gisela Griepentrog], Berlin.
- [Basile1] Basile, Giambattista (1998): *Lo cunto de li cunti, con testo napoletano e traduzione a fronte*, cura di Michele Rak, Milano.
- [Basile2] Basile, Giambattista (1846): *Der Pentamerone, oder das Märchen aller Märchen*. Aus dem Neapolitanischen übertragen von Felix Liebrecht, nebst einer Vorrede von Jacob Grimm, Breslau.

- Barchilon, Jacques (1990): *L'histoire de La Belle au bois dormant dans le Perceforest*. Dons: Fabula 31, 17-23.
- Bausinger, Hermann (1999): *Volkskunde. Von der Altertumsforschung zur Kulturanalyse*. 2. Auflage, Tübingen.
- [Bechstein, Ludwig] (1846): *Deutsches Märchenbuch*. Hrsg. von Ludwig Bechstein. Mit 10 Stahlstichen, Leipzig.
- [BP] Bolte, Johannes/Polivka, Georg (1913, 1915, 1918, 1930-1932): *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm* 1-5 [Bd. 4: Unter Mitwirkung von Elisabeth Kutzer und Bernhard Heller, Bd. 5: Unter Mitwirkung von Walter Anderson et al], Leipzig.
- [BBG] (1989) *Die Bibliothek der Brüder Grimm. Annotiertes Verzeichnis des festgestellten Bestandes*. Erarbeitet von Ludwig Denecke und Irmgard Teitge, hrsg. von Friedhilde Krause, Weimar.
- Bradley-Birt, Francis Bradley (1920): *Bengal Fairy Tales*. London, New York.
- Bréal, Michel (1896): Préface. Dans: Alfred (1896), I-V.
- Camarena, Julio Laucirica (1985): La bella durmiente en la tradición oral ibérica e iberoamericana, *Revista de Dialectología y Tradiciones Populares*, 259-278.
- Camarena, Julio/Chevalier, Maxime (1995/97/2003/2003/de próxima publicación): *Catálogo tipológico del cuento folklórico español*. ([1] Cuentos maravillosos; [2] Cuentos de animales; [3] Cuentos religiosos, [4] Cuentos – Novela; [5] Cuentos de ogro estúpido), Madrid.
- Cardigos, Isabel (2006): *Catalogue of Portuguese Folktales* (FF Communications 291), in collaboration of Paulo Correia and J.J. Dias Marques, Helsinki.
- Dekker, Ton (1997): Doornroosje. In: Dekker, Ton/van der Kooi, Jurjen/Meder, Theo: *Van Aladdin tot Zwaan kleef aan. Lexicon van sprookjes. ontstaan, ontwikkeling, variaties*, Nijmegen, 103-105.
- Delarue, Paul/Tenèze, Marie-Louise (1964/1976/1985/2000): *Le Conte populaire français. Catalogue raisonné des versions de France et des pays de langue française d'outre-mer* 2-4,1/ [2], Paris. Tome 4 [2] avec la collaboration de Josiane Bru.
- Denecke, Ludwig (1990a): Grimm, Jacob Ludwig Carl. In: *EM* 6, 171-186.
- Denecke, Ludwig (1990b): Grimm, Wilhelm Carl. In: *EM* 6, 186-195.
- Dillaye, Frédéric (1880): Notes et Variantes. Dans: *Perrault (1880)*, 199-227.
- El-Shamy, Hasan M. (2004): *Types of the Folktale in the Arab World. A Demographically Oriented Tale-Type Index*, Bloomington.
- [EM] (1977-): *Enzyklopädie des Märchens. Handwörterbuch zur historischen und*

- vergleichenden Erzählforschung*. Hrsg. von Kurt Ranke zusammen mit Hermann Bausinger et al. Redigiert von Lotte Baumann et al. Berlin, New York.
- Franci, Giovanna/Zago, Ester (1984). *La bella addormentata. Genesi e metamorfosi di una fiaba*, Bari.
- Ginschel, Gunhild (1988): *Der junge Jacob Grimm, 1805-1819*. 2., um den Aufsatz „Der Märchenstil Jacob Grimms“ und ein Register erw. Aufl., Berlin.
- Golther, Wolfgang (1930-1933): Dornröschen. In: *HdM* 1, 408-411.
- [KHM-HR] [Brüder Grimm] (1975): *Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm. Synopse der handschriftlichen Urfassung von 1810 und der Erstdrucke von 1812*. Hrsg. und erläutert von Heinz Rölleke, Cologny-Genève.
- [KHM-HL] [Brüder Grimm] (1927): *Märchen der Brüder Grimm. Urfassung nach der Originalhandschrift der Abtei Ölenberg im Elsass*. Hrsg. von Joseph Lefftz, Heidelberg.
- [KHM-IF] [Brüder Grimm] (1986): *Kinder- und Hausmärchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm. Vergrößerter Nachdruck der zweibändigen Erstausgabe von 1812 und 1815 nach dem Handexemplar des Brüder Grimm-Museums Kassel mit Ergänzungsheft (Transkriptionen und Kommentare)*. In Verbindung mit Ulrike Marquardt hrsg. von Heinz Rölleke, Göttingen.
- [KHM-Anm1] [Brüder Grimm]: Anhang. In: [KHM-IF], Bd. 1, I-LX: dass, Bd. 2, I-LXX.
- [KHM-II] [Brüder Grimm] (1819): *Dass*. 2. Auflage. 2 Bde, Berlin.
- [KHM-Anm2] [Brüder Grimm] (1822): *Dass. Bd. 3 [Anmerkungen]*. 2. Auflage, Berlin.
- [KHM-III] [Brüder Grimm] (1837): *Dass*. 3. Auflage. 2 Bde, Göttingen.
- [KHM-IV] [Brüder Grimm] (1840): *Dass*. 4. Auflage. 2 Bde, Göttingen.
- [KHM-V] [Brüder Grimm] (1843): *Dass*. 5. Auflage. 2 Bde, Göttingen.
- [KHM-VI] [Brüder Grimm] (1850): *Dass*. 6. Auflage. 2 Bde, Göttingen.
- [KHM-Anm3] [Brüder Grimm] (1856): *Dass. Bd. 3 [Anmerkungen]*. 3. Auflage, Göttingen.
- [KHM-VII] [Brüder Grimm] (1857): *dass*. 7. Auflage. 2 Bde, Berlin.
- [Brüder Grimm] (2011): *Es war einmal. Die wahren Märchen der Brüder Grimm und wer sie ihnen erzählte*. Hrsg. von Heinz Rölleke und Albert Schindehütte, Frankfurt am Main.
- [Brüder Grimm] (1994): *Deutsche Sagen*. Hrsg. von den Brüdern Grimm, Ausgabe auf der Grundlage der 1. Aufl. ediert und kommentiert von Heinz Rölleke, Frankfurt am Main.
- [Brüder Grimm] (1984): *Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm*. 33 Bde. Hrsg. von der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin in

- Zusammenarbeit mit der Akademie der Wissenschaften zu Göttingen. Bearbeitet in der Arbeitsstelle Berlin von A. Huber. Fotomechanischer Nachdruck der Erstaussgabe 1971, München.
- [Brüder Grimm] (1985): *Schriften und Reden*. Ausgewählt und hrsg. von Ludwig Denecke, Stuttgart.
- [Brüder Grimm] (1963): *Briefwechsel Zwischen Jacob und Wilhelm Grimm aus der Jugendzeit*. Hrsg. von Herman Grimm und Gustav Hinrichs. 2., verm. und verb. Aufl., besorgt von Wilhelm Schoof, Weimar.
- Grimm, Jakob (1846): Vorrede. In: *Basile (1846)*, V-XXIV.
- Grimm, Jacob (1989): *Deutsche Grammatik*. 7 Bde. Hrsg. von Elisabeth Feldbusch und Ludwig Erich Schmitt. Hildesheim.
- Grimm, Jacob (1992): *Deutsche Rechtsalterthümer*. 2 Bde. Mit einer Einleitung von Ruth Schmidt-Wiegand. Nachdruck der 4., verm. Ausg., Leipzig 1899, Hildesheim.
- Grimm, Jacob (1999): *Geschichte der deutschen Sprache*. 2 Bde. Nach der Ausgabe von Hermann Grimm und Karl Müllenhoff neu herausgegeben von Maria Herrlich, Hildesheim.
- Grimm, Jacob (2000): *Weisthümer*. 7 Bde. Nach der Ausgabe von Ernst Dronke und Heinrich Beyer, neu herausgegeben von Dieter Werkmüller, Hildesheim.
- Grimm, Jacob (2001-2003): *Deutsche Mythologie*. 3 Bde. Nach der Ausgabe von Elard Hugo Meyer neu herausgegeben von Helmut Birkhan, Hildesheim.
- Grimm, Wilhelm (1999): *Die deutsche Heldensage*. Nach der Ausgabe von Reinhold Steig, Karl Müllenhoff und Oskar Jänicke, neu herausgegeben von Otfrid Ehrismann. Mit der Vorrede zur 2. Auflage von Karl Müllenhoff, Zeugnissen und Exkursen von Karl Müllenhoff und Oskar Jänicke, dem Briefwechsel über das Nibelungenlied zwischen Karl Lachmann und Wilhelm Grimm und einem Brief K. Lachmann an Jacob Grimm, Hildesheim.
- Grimm, Herman (1895): Die Brüder Grimm. Erinnerungen von Herman Grimm. In: *Deutsche Rundschau* 82, 85-100.
- Hagen, Rolf (1955) Perraults Märchen und die Brüder Grimm. In: *Zeitschrift für deutsche Philologie* 74, 392-410.
- [HdM] (1930-1933/1934-1940) *Handwörterbuch des deutschen Märchens* 1-2. Hrsg. unter besonderer Mitwirkung von Johannes Bolte und Mitarbeit zahlreicher Fachgenossen von Lutz Mackensen [bis „G“], Berlin.
- Haiding, Karl (1953): *Österreichs Märchenschatz. Ein Hausbuch für Jung und Alt*, Wien.
- Hewitt, J. F. (1890): Notes on the Early History of Northern India. Part VI. On the

- Historical Value, Origin, and Growth of Early Methods of Record anterior to Alphabets, including Ideographic Signs, Sacred Numbers, and Myths. In: *Journal of the Royal Asiatic Society* 22 (4), 697-758.
- Hodne, Ørnulf (1984): *The Types of the Norwegian Folktale*, Oslo, Bergen, Stavanger, and Tromsø.
- Hoffory, Julius (1885): Vorrede. In: *Lieder der alten Edda. Deutsch durch die Brüder Grimm*. Neu herausgegeben von Julius Hoffory, Berlin, VII-XIII.
- Huet, Gédéon (1923): *Les contes populaires*, Paris.
- Krohn, Kaarle (1910): *Erster Bericht über die Tätigkeit des folkloristischen Forscherbundes „FF“* (FF Communications 4), Helsinki.
- Lüthi, Max (1981): *Das europäische Volksmärchen. Form und Wesen*. 7., durchgesehene Aufl., Tübingen.
- Marzolph/Leeuwen (2004) *The Arabian Nights Encyclopedia*. Ed. by Ulrich Marzolph and Richard van Leeuwen, with The Collaboration of Hassan Wassouf 1-2, Santa Barbara, Denver and Oxford.
- Maury, Alfred (1896): *Croyances et légendes du moyen âge. Nouvelle édition des Fées du moyen âge et des Légendes pieuses*. Publiées d'après les notes de l'auteur par MM. Auguste Longnon et G. Bonet-Maury. Avec une préface de M. Michel Bréal. Paris.
- Mazenauer, Beat/Perrig, Severin (1998): *Wie Dornröschen seine Unschuld gewann. Archäologie der Märchen*. München.
- Meyer, Maurits de (1968): *Conte Populaire Flamand. Catalogue analytique* (FF Communications 203), Helsinki.
- Mode, Heinz/Ray, Arun (ca. 1967): *Bengalische Märchen*, Leipzig.
- Neemann, Harold (2007): Schlafende Schönheit. In: *EM* 12, 13-19.
- Oriol, Carme/Pujol, Josep M. (2003): *Índex tipològic de la rondalla catalana*, Barcelona.
- Papachristophorou, Marilena (2002): *Sommeils et Veilles dans le conte merveilleux grec* (FF Communications 279), Helsinki.
- [Perrault1] [Charles Perrault] (1980) *Contes de Perrault. Fac-similé de l' édition originale de 1695-1697*. Avec une préface de Jacques Barchilon, Genève.
- [Perrault2] [Perraults, Charles] (1956) *Perrault's Tales of Mother Goose. The Dedication Manuscript of 1695 Reproduced in Collotype Facsimile*. With Introduction and Critical Text by Jacques Barchilon. 2 Vol. New York.
- [Perraults, Charles] (1880) *Les Contes de Perrault, d'après des textes originaux, avec notice, notes et variantes et une étude sur leurs origines et leur sens mythique par Frédéric Dillaye*, Paris.

- [Perraults, Charles] (1967) *Contes. Perrault*. Textes établis, avec introduction, sommaire biographique, bibliographie, notices, relevé de variantes, notes et glossaire, par Gilbert Rouger, Paris.
- [Perraults, Charles] (1989) *Contes*. Textes établis et présentés par Marc Soriano, Paris.
- Rölleke, Heinz (1975): Die „stockhessischen“ Märchen der „Alten Marie“. Das Ende eines Mythos um die frühesten KHM-Aufzeichnungen der Brüder Grimm. In: *Germanisch-Romanische Monatsschrift* 25, 74-86.
- Rölleke, Heinz (1984): Die Stellung des Dornröschenmärchens zum Mythos und zur Heldensage. In: *Antiker Mythos in unserem Märchen*. Hrsg. von Wolfdietrich Siegmund. Kassel, 125-137.
- Rölleke, Heinz (2004): *Die Märchen der Brüder Grimm. Eine Einführung*, Leipzig.
- Rölleke, Heinz (2008): Anhang: In: *Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm*. Mit einem Anhang sämtlicher, nicht in allen Auflagen veröffentlichter Märchen und Herkunftsnachweisen hrsg. von Heinz Rölleke. 7. verbesserte Auflage, Stuttgart, 341-592.
- [Rölleke/Marquardt] Ergänzungsheft (Transkriptionen und Kommentare). In Verbindung mit Ulrike Marquardt hrsg. von Heinz Rölleke. In: *[KHM-IF]*.
- Romain, Alfred (1933): Zur Gestalt des Grimmschen Dornröschenmärchens. In: *Zeitschrift für Volkskunde* 42, 84-116.
- Rosenfeld, Hans-Friedrich (1964): Golter, Wolfgang. In: *Neue Deutsche Biographie*. Bd. 6, Berlin, 626.
- Röth, Diether (1998): *Kleines Typenverzeichnis der europäischen Zauber- und Novellenmärchen*. Im Auftrag der Märchenstiftung Walter Kahn, Baltmannsweiler.
- Röth, Diether (2004): *Kleines Typenverzeichnis der europäischen Zauber- und Novellenmärchen. Im Auftrag der Märchenstiftung Walter Kahn*. Erweiterte. 2. Auflage, Baltmannsweiler.
- Saintyves, Pierre (1987): *Les contes de Perrault et les récits parallèles (leurs origines)*. En marge de la légende dorée, Paris.
- Scherf, Walter (1995): *Märchenlexikon* 1-2, München.
- Schmidt, Kurt (1932): *Die Entwicklung der grimmschen Kinder- und Hausmärchen seit der Urhandschrift, nebst einem kritischen Texte der in die Drucke übergegangenen Stücke*, Halle (Saale).
- Schoof, Wilhelm (1959): *Zur Entstehungsgeschichte der Grimmschen Märchen. Bearbeitet unter Benutzung des Nachlasses der Brüder Grimm*, Hamburg.

- Schoof, Wilhelm (1963): Zur Geschichte des Grimmschen Märchenstils. In: *Der Deutschunterricht. Beiträge zu seiner Praxis und wissenschaftlichen Grundlegung* 15 (2), 90–99.
- Seitz, Gabriele (1984): *Die Brüder Grimm. Leben - Werk - Zeit*, München.
- Soriano, Marc (1968): *Les contes de Perrault. Culture savante et traditions populaires*, [Paris].
- Spiller, Reinhold (1893): *Zur Geschichte des Märchens vom Dornröschen*, Frauenfeld.
- Spitta-Bey, Guillaume (1883): *Contes arabes modernes*, Leiden/Paris.
- Starostina, Aglaia (2011): Chinese Medieval Versions of Sleeping Beauty. In: *Fabula* 52, 189-206
- Steig, Reinhold (1892): *Goethe und die Brüder Grimm*, Berlin.
- Steig, Reinhold (1904): *Achim von Arnim und Jacob und Wilhelm Grimm. Bearbeitet von Reinhold Steig* (Achim von Arnim und die ihm nahe standen, hrsg. von Reinhold Steig und Herman Grimm. Bd. 3), Stuttgart.
- [Mot.] Thompson, Stith (1955-1958): *Motif-Index of Folk-Literature. A Classification of Narrative Elements in Folktales, Ballads, Myths, Fables, Mediaeval Romances, Exempla, Fabliaux, Jest-Books and Local Legends*. 2. revised and enlarged Edition, Copenhagen.
- Thompson, Stith (1977): *The Folktale*, Berkeley/Los Angeles/London. (Reprinted 1977, 1946 by Hold Rinehart & Winston)
- Tonnelat, Ernest (1912): *Les contes des frères Grimm. Étude sur la composition et le style du recueil des „Kinder- und Hausmärchen“*, Paris.
- Travers, P. L. (1977): *About the Sleeping Beauty*, London.
- Uther, Hans-Jörg: (1996): *Nachweise und Kommentare, Literaturverzeichnis. Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen*. Nach der Großen Ausgabe von 1857 hrsg. textkritisch revidiert, kommentiert und durch Register erschlossen von Hans-Jörg. Bd. 4, München.
- Uther, Hans-Jörg (2003): Ranke, Kurt. In: *Neue Deutsche Biographie*. Bd. 21, Berlin, 145-146.
- [ATU] Uther, Hans-Jörg (2004): *The Types of International Folktales. A Classification and Bibliography* 1-3 (FF Communications 284-286), Helsinki.
- Uther, Hans-Jörg (2008): *Handbuch zu den „Kinder- und Hausmärchen“ der Brüder Grimm. Entstehung - Wirkung - Interpretation*, Berlin.
- Valjavec, Matija (1890): Narodne pripovjesti u Varaždinu i okolici, Zagreb.
- Vogt, Friedrich (1896): Dornröschen-Thalia. In: *Beiträge zur Volkskunde: Festschrift Karl*

Weinhold, Breslau, 195-237.

Vries, Jan de (1958): Dornröschen. In: *Fabula* 2, 110-121.

Weber-Kellermann, Ingeborg/Bimmer, Andreas C./Becker, Siegfried (2003): Einführung in die Volkskunde/Europäische Ethnologie. Eine Wissenschaftsgeschichte. 3. Auflage, Stuttgart.

Zago, Ester (1983): "Frayre de Joy e Sor de Plaser", Re-examined. In: *Fabula* 24, 269-274.

[Grimm-Edda]: [Brüder Grimm] *Lieder der alten Edda*. Aus der Handschrift herausgegeben und erklärt durch die Brüder Grimm, Berlin 1815.

[Grimm-Edda2]: [Brüder Grimm] *Lieder der alten Edda*. Deutsch. In: *[Grimm-Edda]*.

[Edda-Neckel/Kuhn] (1983): *Die Lieder des Codex Regius nebst verwandten Denkmälern*. Hrsg. von Gustav Neckel. Bd 1. 5., verb. Aufl von Hans Kuhn, Heidelberg.

[Edda-Genzmer] (1981): *Die Edda. Götterdichtung, Sprachweisheit und Heldengesänge der Germanen*. Einbändige Ausgabe. Übertragen von Felix Genzmer, eingeleitet von Kurt Schier, Düsseldorf.

[Völsunga saga] (1965): *The Saga of the Volsungs*. Edited and Translated with Introduction, Notes and Appendices by R.G. Finch. London.

[Perceforest] (1987/1988/1991/1993/1999/2001/2007): *Perceforest*. Éd. Gilles Roussineau, Genève. Quatrième partie, tome I, 1987; Troisième partie, tome I, 1988; Troisième partie, tome II, 1991; Troisième partie, tome III, 1993; Deuxième partie, tome I, 1999; Deuxième partie, tome II, 2001; Première partie, 2007, 2 tomes.

[L-B] Harold Neeman, In: *Laramie Boomerang*, Friday, June 11, 2010.

日本語の参考文献

足立信彦 (1986 年) 「ヤーコプ・グリムにおける歴史と国民意識」東京大学教養学部外国語科編『外国語科研究紀要』第 34 巻 1 号所収、1-23。

岡本英明 (2001 年) 「グリムのメルヘン「いばら姫」(KHM 50) 解釈について——その文献学的、教育学的考察」『九州大学大学院教育学研究紀要』第 3 号所収、107-129。

小澤俊夫 (1985 年) 『素顔の白雪姫——グリム童話の成り立ちをさぐる』光村図書出版。

堅田剛 (2007 年) 『法のことば／詩のことば——ヤーコプ・グリムの思想史』御茶の水書房。

河野眞 (2005 年) 『ドイツ民俗学とナチズム』創土社。

鈴木晶 (1991 年) 『グリム兄弟——メルヘンの深層』講談社。

鈴木万里 (2009 年) 「「眠り姫」の変遷」『東京工芸大学芸術学部紀要』第 15 号所収、53-65。

高木昌史 (2002 年) 『グリム童話を読む事典』三交社。

竹原威滋（2006 年）『グリム童話と近代メルヘン』三弥井書店。

西口拓子（2002 年）「グリム『昔話集』——グリムの加筆と「神話」へのまなざし」（博士論文）
東京外国語大学大学院総合国際学研究科。

野口芳子（1994 年）『グリムのメルヒェン——その夢と現実』勁草書房。

間宮史子（2002 年）「『いばら姫』のテキスト変遷」『昔話研究の地平——小澤俊夫教授古
稀記念論文集』小澤俊夫教授古稀記念論文集編集委員会編、小澤むかし話研究所所収、
85-101。

（2013 年 10 月 1 日受理）

（よこみち まこと 文学部欧米言語文化学科講師）